

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 14 日現在

機関番号：32710

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370803

研究課題名(和文) 近世後期におけるオランダ船脇荷物輸入の研究

研究課題名(英文) A Study of kambang goods imported by Dutch Vessels in the late-Edo Period

研究代表者

石田 千尋 (ISHIDA, Chihiro)

鶴見大学・文学部・教授

研究者番号：00192485

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：19世紀前半に、蘭船が日本に持ち渡った私的貿易品といわれる脇荷物に焦点を絞り、その輸入実態を日蘭両側の貿易史料を照合・解明し、日蘭貿易における脇荷物の位置付けを試みた。今回は特に1840年代を中心に考察したが、当時の脇荷貿易は、1835年に始まったバタヴィア政府が許した賃借人による取引であり、ガラス器や陶磁器といった食器類、さらに薬品類が非常に多く、本方荷物にはみられない多岐にわたる品々が存在していた。また、書籍類などは脇荷取引以外として賃借人によって持ち渡られ取引されていたが、これらの品々は、当時の蘭学興隆の面からみると日本文化史上、大変重要な意義を有していたといえる。

研究成果の概要(英文)：The real state of the imports of the so-called kambang goods, the private goods brought to Japan on Dutch ships in the first half of the 19th Century, has been counter-checked and clarified against the Dutch and Japanese historical trade materials, and an attempt was made to position these kambang goods within the overall Dutch-Japanese trade. This time, the research focused on the 1840s, when, starting in 1835, the trade in kambang goods was executed by a leaseholder (pachter) with the permission of the Batavian Government. These goods consisted mainly of tableware in glass, earthenware and porcelain, as well as a wide variety of medicines and other goods which did not feature in the regular Companies' trade. Books were also brought to Japan by the pachter, but traded outside the kambang trade transactions. These goods have been of enormous significance for the cultural history of Japan, especially during the heyday of Rangaku (Dutch Studies).

研究分野：人文学

キーワード：日蘭貿易 オランダ船 脇荷貿易 脇荷物 出島

## 1. 研究開始当初の背景

(1) いわゆる鎖国体制下において、長崎に來航していたオランダ船は、わが国にとってヨーロッパ唯一の通商相手であった。オランダ船が持ち渡った輸入品は時の中央権力である江戸幕府の管理・統制のもとに取引された。オランダ船が持ち渡った積荷物は、オランダの通商圏内の品々であり、それが各種の手続きを経た後、日本市場にもたらされ、当時の日本文化・社会・政治・経済にさまざまな影響を与えていった。オランダの通商圏は、ヨーロッパおよび東インドにおけるオランダの立場によって変動をきたし、その変動は自ずと日本との貿易および貿易品に影響を与えずにはおかなかった。したがって、オランダ船が当時長崎に持ち渡った積荷物とその取引・流通の解明は、近世の日蘭貿易史および日蘭関係史ばかりでなく、日本文化・社会・政治・経済史を考える上において重要な課題といえる。

(2) 近世の日蘭貿易は、大きく分けて二つの取引がおこなわれていた。一つは本方貿易と称し、オランダ東インド会社の会計に属する商品群の取引であり、東インド会社にとって直接損益にかかわるものであった。もう一つは脇荷貿易と称し、一定額だけ許された私貿易品の取引であった。なお、オランダ東インド会社は 1799 年に崩壊し、その後、日本との貿易はバタヴィアの東インド政府の管理下に入り、長崎商館（出島）はこの政府の商館になるが、長崎商館での本方貿易・脇荷貿易は以前同様につづけられた。

(3) オランダ船が持ち渡った積荷物には、本方荷物～主に本方貿易で取引される商品、脇荷物～主に脇荷貿易で取引される商品、誂物～將軍をはじめとする幕府高官・長崎地役人等によってオランダ船に注文されたものの持ち渡り品、献上・進物品～オランダ人が貿易取引を許されている御礼として江戸参府の際に贈る品（將軍へは献上品、幕府高官へは進物品と称した。なお、これらの品は本方荷物の中から取引前に選り分けられたものである。）、その他、各所への贈り物やオランダ人が長崎商館で使用する日用品である遣捨品などが存在した。

(4) 上記の内、脇荷貿易ならびに脇荷物に関して、従来、国内では、関山直太郎「看板（Kambang）貿易考」（『経済史研究』第 13 巻第 6 号、1935 年）・永積洋子「オランダ商

館の脇荷貿易について - 商館長メイランの設立した個人貿易協会(1826 - 1830) - 」（『日本歴史』第 379 号、1979 年）・山脇悌二郎「脇荷貿易雑考」（箭内健次編『鎖国日本と国際交流』下巻、吉川弘文館、1988 年）等を挙げることができる。また、国外では、Dalhuizen, L.G.; De Societeit van Particuliere Handel op Japan, 1826-1830. Leiden. 等が挙げられる。しかし、日蘭両史料の詳細な照合の上に体系化し、貿易史上、文化史上における脇荷物の位置付けを実証的研究成果の上に進めていくことは今後の重要な課題として残されている。

## 2. 研究の目的

(1) 研究代表者は主に近世の日蘭貿易史を専門としており、オランダ船輸入品、特に、本方荷物や誂物をめぐって、オランダ側貿易史料と日本側貿易史料とを照合することにご数年時間を費やしてきた。その際、当然、脇荷物に関する史料も閲覧することが可能であった。脇荷物が基本的に私的貿易品であることより、オランダ側史料は決して多いとはいえないが皆無ではない。また、日本側史料は本方荷物に比べて不十分ながらも体系的に整理していくことが可能と思われた。さらに近世後期における脇荷物には、本方荷物にはみられない薬品類、ガラス器・陶器・磁器などの食器類、皮革・酒・顔料・時計・雑貨・小間物類が含まれており、当時の蘭学興隆の面からみても、文化史上、大変重要な取引の品々ということが分かってきた。そこで、今回は 19 世紀前半のオランダ船輸入脇荷物に焦点を絞り、基礎的研究となる日蘭両側の貿易関係史料と共に物品そのものを調査・探訪・整理・分析の上、照合を行い、本来の商品名・数量・取引値段・原産地などを明らかにし、併せて日本市場との関係、およびオランダ側の供給体制を調査研究することにした。

(2) すなわち、本研究は、脇荷貿易で取引された脇荷物を正面より取り上げ、その実態を国内・国外史料の突き合わせによって、解明しようとするものであり、従来、不明確であった点を明確にし、実態によって基礎的に解明していこうとするものである。

## 3. 研究の方法

考察年代を 19 世紀前半に設定し、次の方法で研究を進めていく。

(1) オランダ側史料（「送り状」等）とそ

の翻訳である日本側史料（「積荷目録」等）を収集、照合し、オランダ船「脇荷物」に関する彼我の用語を確定し、如何なる脇荷物が当時、日本に入って来ていたか究明する。

(2) オランダ側史料（主として「送り状」）を分析し、個々の品物の出島までの流通過程を究明する。

(3) オランダ側史料（「日本商館脇荷勘定帳」等）・日本側史料（「御内用方諸書留」等）の分析を通して長崎での取引を究明する。

(4) 日本市場にもたらされた個々の品物が日本国内において如何なる流通をみたか、蘭人・商人・長崎地役人の動きに注目し、解明する。

(5) オランダ側に焦点を移し、オランダ側の事情が、日蘭貿易、特に脇荷物（品目・数量・原産地等）に如何なる影響を与えていたか、国際事情と日本国内の事情とを有機的に検討し、19世紀前半の日本の対外交渉の一面を物より解明する。

(6) 近世後期、オランダ船輸入の脇荷物の取引を担当した阿蘭陀通詞（加役としての御内用方通詞、後には御用方通詞と呼ばれた）が書き留めた「諸書留」類3冊（「御内用方諸書留」・「天保十三寅年ヨリ 御用方諸書留」・「弘化三年八月ヨリ 諸書留」いずれも長崎歴史文化博物館収蔵）を読み込み、その記述内容にオランダ側史料を照合する形で調査分析し、オランダ船が輸入した脇荷物とは当時の日蘭貿易の上でどのような位置付けができるのか研究を進める。

#### 4. 研究成果

(1) 脇荷貿易はそのはじまりである17世紀より、オランダ商館長以下の館員や船員の役得として許された私貿易品の取引であった。1827年(文政10)バタヴィア政庁は商館職員・船員らの脇荷貿易組合 *Particuliere Handelsociëteit* の結成を承認して5万グルデンを限度とする貿易を許した。ところが、1830年(文政13)には、この組合は解消され、その後、脇荷貿易をおこなう権利はバタヴィアで入札に付され、落札者が脇荷貿易権の賃借人として長崎で貿易することに改められ、商館職員・船員等の私貿易関与・参加は排除されたといわれてきた。しかし、このようなシステムが一体いつから始まり、それがどのようなものであったのか明らかにされてこなかったことより、今回の研究では、まず、この点について調査研究をおこなった。

その結果、商館職員や船員等の私貿易関

与・参加が排除され、賃借人による独占的な脇荷貿易システムに改変されたのは、天保6年(1835)であったことが判明した。その原因としては、商館職員・船員等が本方貿易よりも脇荷貿易に力を注いでおり、脇荷貿易が密貿易状態となっていたことによるものであった。賃借人による同年の取引はバタヴィアで政庁との間で結ばれた契約に基づいておこなわれており、以前同様5万グルデンを限度とするものであり、その内、2/3が脇荷取引であり、1/3は自由処分と決められ、その通り実行されていたことが判明した。

(2) 次に、弘化期から嘉永期初(1845年～1848年)に焦点を絞り、オランダ側史料と日本側史料とを照合し、オランダ船が持ち渡った脇荷物に関する基礎的研究をおこなった。

当時の脇荷貿易は、1835年に始まったバタヴィア政庁が許した賃借人による取引であり、ガラス器や陶磁器といった食器類、さらに薬品類が非常に多く、その他雑貨類や酒類などで、本方荷物にはみられない多岐にわたる品々が存在していた。また、書籍類などは脇荷取引以外として賃借人によって持ち渡られ取引されていた。この弘化期から嘉永期初に賃借人によって持ち渡られた品々は、当時の蘭学興隆の面からみると文化史上、大変重要な意義を有していたといえる。19世紀も中期を迎えるに従って日蘭貿易における脇荷取引、および賃借人による自由処分の品々は、その取引量と種類の多さより重要な取引となっていたことが理解できる。

(3) また、上記の内、弘化4年(1847)の事例より、以前のオランダ商館長以下の館員や船員による取引に比べて脇荷物の収益率が高くなっていたことが判明した。脇荷取引の主体となるオランダ側売主の変更は貿易そのものを大きく変えてきていたことが推測できる。

(4) 天保15年(1844)を事例に、脇荷物を含むオランダ船が持ち渡った輸出品（本方荷物・脇荷物・詔物）に関するオランダ側史料と日本側史料とを調査・検討し、同年のオランダ船の持ち渡り品の彼我の用語を明らかにすると共に、それらの取引を解明し、この年の日蘭貿易について言及した。オランダ側に視点を置いてみると、天保15年の日蘭貿易は、長崎での取引段階では収益は得られず、日本から持ち帰った物資の販売により収益を生む構造になっていた。これは、「取引の

総額（御定高）」が決められていることによって生じている現象ではあるが、そこまでして貿易を継続しようとするオランダ側の姿勢の背後には、当時（19世紀中葉）の国際環境の中で日本市場を確保しつづけようとするオランダの思惑があったのではないかと考えられる。

(5) オランダ船によって輸入されたガラス器について、日本側とオランダ側の貿易関係史料を照合し、文献史料的に解明すると共に、それら史料に描かれた絵図に注目して伝世品との照合を試み、物と文献との両面から考察をおこなった。このような基礎的研究が可能となる背景には、当時の日本側のガラス器に対する需要の高さがあったことが理解でき、また、一つ一つの事例から当時の日本人がどのようなパターンを好んでいたのかも伺い知ることができた。なお、ガラス器は脇荷物だけでなく、誂物も含めて考察をおこなった。

(6) 研究代表者が所属する鶴見大学文学部文化財学科に寄贈された「更紗裂」432枚について整理と考察をおこなった。この「更紗裂」はオランダ船が近世後期に日本に輸入した更紗の裂（端切れ）であり、本方貿易と脇荷物貿易で取引されたものと考えられる。これらの裂はインド産の更紗裂とヨーロッパ産の更紗裂からなっている。何故このような裂の形になっているのか、また、どのような経緯で現在のような端切れの塊として存在しているのかを考察し、さらにこの寄贈「更紗裂」の特色とともに史料的価値について言及した。

(7) 「近世後期におけるオランダ船脇荷物輸入の研究」をさらに実証・解明していくためには、より多くの事例を今後も積み重ねていく必要がある。その調査研究を通して近世後期における脇荷物貿易、ひいては日蘭貿易そのものの存在意味が解明されていくものと思われる。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計9件）

石田千尋「江戸時代後期における出島貿易品の基礎的研究 - 天保15年(1844)を事例として - 」(『鶴見大学紀要』第54号第4部、査読無、2017年、17頁～46頁)

石田千尋「幕末期におけるオランダ船脇荷物輸入の基礎的研究 - 嘉永元年(1848)を事例として - 」(『鶴見大学紀要』第54号第4部、査読無、2017年、79頁～86頁)

石田千尋「賃借人の登場 - 近世後期におけるオランダ船脇荷物貿易システムの改変とその実態 - 」(『洋学』第23号、査読有、2016年、1頁～25頁)

石田千尋「幕末期における蘭船脇荷物輸入の基礎的研究 - 弘化2年(1845)を事例として - 」(『文化財学雑誌』第12号、査読無、2016年、5頁～16頁)

石田千尋「幕末期における蘭船脇荷物輸入について - 弘化3年(1846)を事例として - 」(『鶴見大学紀要』第53号第4部、査読無、2016年、11頁～23頁)

石田千尋「オランダ船の輸入更紗 - 文化財学科新収史料「更紗裂」の紹介を中心として - 」(『鶴見大学紀要』第53号第4部、査読無、2016年、69頁～88頁)

石田千尋「日蘭貿易における染織輸入」(フレデリック・クレインス編『日蘭関係史をよみとく』下巻 運ばれる情報と物、臨川書店、査読有、2015年、205頁～232頁)

石田千尋「幕末期におけるオランダ船の脇荷物輸入について - 弘化4年(1847)を事例として - 」(『鶴見大学紀要』第52号第4部、査読無、2015年、43頁～60頁)

石田千尋「江戸時代後期におけるオランダ船のガラス器輸入について」(棚橋淳二、アンナ・ラメーリス、キティ・ラメーリス監修・神戸市立博物館編集『ギヤマン展 - あこがれの輸入ガラスと日本 - 』神戸市立博物館、査読無、2014年、147頁～160頁)

〔学会発表〕（計1件）

石田千尋「賃借人の登場 - 近世後期におけるオランダ船脇荷物貿易システムの改変とその実態 - 」「洋学史学会11月例会」、2015年11月8日、電気通信大学（東京都調布市）

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

石田 千尋 (ISHIDA, Chihiro)

鶴見大学・文学部・教授

研究者番号：00192485

